

名古屋大学 農学国際教育研究センター ニュース

平成30年6月1日発行 通巻33号(年2回発行)

発行/名古屋大学 農学国際教育研究センター

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222

<https://icrea.agr.nagoya-u.ac.jp/>

e-mail:icrea@agr.nagoya-u.ac.jp

農国センター改組について

1. 改編と理由と経緯

農国センターは、1999年4月の設立以来、国際協力に係る教育と研究の実施をミッションとし活動してきました。一方近年、新興国にも食需要の多様性が広がり、食料安全保障や環境保全を前提とした持続的生産へのアプローチとして、先進国が蓄積してきた基礎的知見を技術として確立し、実社会へ馴化するために、フィールドサイエンスの役割が一層重要となってきました。

そこで、設立時のミッションを見直し、法人化後に注力してきた国際共同研究の推進とそれをベースとした教育活動へ取り組みをより明瞭にし、現在のセンター活動の実態に名称を合わせるべく、「農学国際教育協力研究センター(International Cooperation Center for Agricultural Education: ICCAE)」から「協力」という語を外し、「農学国際教育研究センター(International Center for Research and Education in Agriculture: ICREA)」と改め、2018年4月に改組しました。

2. 改編後の新組織

これまでの2研究領域(プロジェクト開発研究領域、協力ネットワーク開発研究領域)を廃止し、研究展開部門には、国内外の関係諸機関・部局等との連携の下、基礎研究を推進するとともに成果をフィールド研究教育へ展開するための機能を強化する目的で、熱帯生物資源、生物遺伝情報、生物資源開発保全利用の3研究室を設置しました。また、実践地域開発部門には、国際フィールドサイエンス研究とそれに基づく教育を推進する目的で、実践アジア開発、実践アフリカ開発の2研究室を置きました。新たに設置した国際連携室は、従来の国際プロジェクト

開発および国際ネットワーク開発といったこれまでのミッションを業務として位置付け、農学知的支援ネットワーク事務局の役割を担うこととしました。(山内 章)

第17回オープンフォーラムを開催

2018年3月3日、第17回オープンフォーラム「ケニア稲作研究で何がわかったのか?」を農学部第12講義室において開催しました。今回のオープンフォーラムは、農国センターがケニア農畜産業研究機構との国際共同研究として2013年5月22日より実施している、JST・JICA地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)による「テラーメード育種と栽培技術開発のための稲作研究プロジェクト」の最終成果報告会として行われました。

主催者および来賓の挨拶に続き、東京大学大学院農学生命科学研究科の櫻井武司教授による基調講演が行われ、サブサハラ・アフリカにおける稲作の「緑の革命」がはじまりつつあることが様々なデータによって示されました。続いて、本プロジェクトに参画しているケニア人研究者5名により、本プロジェクトがこれまでに進めてきたアフリカ向けイネ品種の開発に必要なスクリーニングシステムと交配設備の整備、様々な環境ストレス耐性や生産性を向上させる遺伝子/QTLを導入したアフリカ向け有望系統の作出、品種の能力を引き出す栽培方法の開発、共同研究を通じた人材育成などについて報告が行われました。さらに、日本人研究者3名が、これまでの5年間で得られた研究成果に基づく今後の研究構想について発表を行いました。報告に引き続いて行われた総合討論においては、今後のより発展的な研究構想および研究成果の社会実装への道筋について活発な議論が行われました。また、日本に留学して博士号を取得したケニア人研究者からは、日本の指導教員に「研究者、特に育種家は圃場に出て活動せよ」と教えてもらったことが、今後の研究の指針として胸に刻んで忘れられない言葉になったというエピソードも披露されました。本プロジェクトは2018年5月21日で終了となりますが、その後も本プロジェクトによって育成された人材を核として、これまで以上に双方向の協力体制の下、これまでの研究成果を活用・発展させ、アフリカの稲作生産性の改善に貢献していきたいと考えています。(横原大悟)



ケニアから来日した共同研究者たち